安楽寺寺報

聞光

第96号
歓喜会号

発行所
〒737-0054
呉市上山田町2-28
安楽寺
TEL：0823-21-7561

二つの仏教説話

みなさんは「群盲象を評す(ぐんもうぞうをひょうす)」と言う言葉をご存じでしょうか。この言葉の元になったお話は多分多くの方がご存じだと思います。そのお話とは『涅槃経(ねはんぎょう)』の中にあります。

【昔、鏡面王(きょうめんおう)という仏法を篤(あつ)く信仰する王がいました。王は多くの臣下・国民が仏法を信ぜず、つまらないことで言い争っていたので、何とか尊い仏法を信仰させ、つまらぬ争いをやめさせようと思っておりました。

ある日、王は国内の生まれつき目の見えない人を集め、その目の見えない人達に、大きな象をさわらせてみるよう命じました。その人達は、象とはどのようなものなのか、話には聞いておりましたが、さわるのは生まれて初めてのことです。ある者は、足をさわり、ある者は尾、ある者は腹、ある者は脇、ある者は耳、ある者は鼻をさわり、おのおの象とは、こういうものか」と思ったのです。象をさわり終わるとその目の見えない人達が、言い争いを始めました。

鏡面王は、その様子を見て、「お前たちは今象にさわってみただろう。果たして、象はどのようなものだったか言ってみよ。」と言いました。すると、象の足をさわった者が、「象とは大木のようなものです。」と答えました。尾をさわった者は、「いえ、ほうきのようなものです。」腹をさわった者は、「いいや違う、太鼓のようなものだ。」脇をさわった者は、「壁のようなものだ。」耳をさわった者は、「大きなうちわのようなものだ。」鼻をさわった者は、「象とは大きな縄のようなものです。」と答えました。皆、自分の手で、直接、象に触れた者ばかりです。ですから、「自分が正しい、自分こそが正しく、他の者は間違えている」と主張して譲らなかったのです。その様子を見た鏡面王は、臣下に対して、「一同に目の見ない人達の争いの姿は、目の見えないを笑ってはいけない。」

お前たちと一緒である。皆、真理に迷って、自分の信じているものだけを、最高の教えだと主張して争っている。お前たちは、もっと大きく尊い仏教の教えを知るべきである。目の見えない人達は、空しく争って、自分は正しく、他人は間違いであると非難した。一頭の象をめぐって、お互いに争いあった。そのような愚かな争いをしてはならない。そのような争いをする者は、目があって、真実の目のない者である」と。

この鏡面王の言葉を聞いた人々は、仏教の教えを学ぶようになったということです。】

どこかで聞いたことがある方も多いのではないでしょうか。この話の通り、「群盲象を評す」とは、物事・人物の多面性や、考え・知識に対する偏(かたよ)りの教訓を説いた言葉です。さて、私たちはこのお話をどのように受けとめるのでしょうか。今まで私は説話として聞いてきましたが、人ごとではなく私の事でした。私たちが見えていると思っている現実はほんの一部であり、全体ではありません。そのために悩み、争っていることが多いことです。この人生についても、わが命についても、全体を見つめることのできる仏法へと導いて下さるお話としてしっかりと聞かねばならないことであります。

一枚の写真　信楽　慧

この写真は沖縄の古宇利大橋(こうりおおはし)という全長2kmにも及ぶ海上の橋の写真です。
こちらのスポットは、まるで海の上を走っているような気分が味わえる絶景の橋として、CMなどにもよく起用される、有名なスポットになります。とても綺麗で、今年も行きたかったのですが、コロナウイルスの影響もあり昨年の写真を使ってます。

今年の冬からコロナウイルスが猛威を奮っており、皆さん大変だと思います。
このような時だからこそ宗教や古い価値観・考え方などが重要になる場面もあるかと思います。

例えば、今話題になっている「マインドフルネス瞑想(めいそう)」をご存知でしょうか？
古くから仏教の行となっている瞑想から来ています。この「マインドフルネス瞑想」がテレワークや自粛のストレス解消やメンタルケアにとても効果があると、様々な研究で明らかになってきており、注目されています。

私も瞑想を実践しているのですが、自分をより見つめ直すことができ、ストレスからも開放された心持ちになります。
この瞑想は日常でいつでも数秒からでも実践できるので、ぜひ取り入れてみてください。

＝＝＝＝＝＝＝＝瞑想の方法＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝
① 鼻から空気が入ってくる感覚に意識をむけながら5秒ほどかけて鼻から息を吸う。
② 身体から空気が出ていく感覚に意識を向けながら5秒ほどかけて口から息を吐く。
③ 考え事をしてしまったり、呼吸から注意がそれたら呼吸に意識を向け直す。
①~③を繰り返す。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

編集後記

今回初めて編集長をさせていただきました。
マンガは10年以上描いてきましたが、他の記事を読んだことのない勉強不足の私には少しでも教えに触れることの出来る良い機会でありました。
まだまだ未熟な編集ではありますがお付き合いいただけると幸いです。
信楽めぐみ

安楽寺マンガ通信
その46　信楽めぐみ作

もう一つ『箭喩経(せんゆきょう)』の中にある「毒矢(どくや)のたとえ」というお話を紹介します。

【釈尊(しゃくそん)の弟子マールンクヤプトラは「世界に終わりがあるのか。」「世界は無限か？」「生命と身体は同一か？」などの疑問を持っていました。そして、マールンクヤプトラはブッダのところに行き質問をします。「世界に終わりがあるのか？」「世界は無限か？」「生命と身体は同一か？」「ブッダが答えてくれたなら、わたしは修業を続けます。もしブッダが答えてくれなければ、わたしは還俗(げんぞく)し元の生活にもどります。」

するとブッダは逆にマールンクヤプトラにこう問います。

「マールンクヤプトラよ、わたしはあなたに、「世界に終わりがあるとか、終わりがないとか」、「世界は無限であるとか、限りがあるとか」「生命と身体は同一である」、などと教え伝えたことがあるか？

マールンクヤプトラは「ありません」と答えます。「それなのになぜ、そんなことを聞くのか。真理(しんり)を教えている人が、そのようなことを教えていないのに、教えていない回答を聞くまでは、修業をしません。そのようなことをいう人がいれば、その人は永遠に教えを聞かないまま死んでいってしまうであろう。」

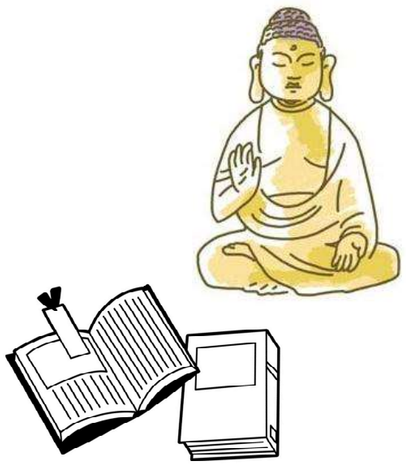
「ある人が毒をぬった矢で射(い)られたとしよう。その人が治療(ちりょう)をしようとする人に、だれがこの毒矢をわたしに射ったのですか。それを知るまでは、わたしはこの矢は抜かない。また、わたしを射った人の肌はどんな色ですか。

それを知るまでは、わたしはこの矢は抜かない。それを知るまでは、わたしを射った人はどこに住んでいますか。また、わたしはこの矢は抜かない。また、言ったら、矢を射られた者は、その答えを知らないうちに死んでしまうであろう。それと同じようなことを教えている人が、そのようなことを教えていない回答を聞いないのに、「教えていない回答をくまでは、修業をしません。という人がいれば、その人は永遠に教えを聞かないまま死んでいってしまうであろう。」

さらにブッダは「わたしは生きているものには、老いがあり、死があり、悩みや苦しみがあり、その悩みや苦しみの解決を教えているのです。それゆえ、わたしが教えなかったことは、教えていないこととして認識しなさい。わたしが教えていることだけを理解するようにしなさい。ではなぜ、わたしは「世界に終わりがあるのか。」「世界は無限か。」「生命と身体は同一か。」など教えないのか。このようなことは。目的にかなわず、清らかな行いにならず、煩悩(ぼんのう)の消滅(しょうめつ)、ころの安らぎ、すぐれた智慧(ちえ)、正しいさとり、涅槃(ねはん)のために役に立たないから、わたしはそのようなことは教えないのです。と。】

このお話も私たちにむけられたものです。ただのたとえ話ではなく、私に今刺さっている苦しみの矢をぬく方法を説いて下さっているのです。私たちは様々な物事に関心を持ち、色々な疑問を持つかも知れませんが、私たちが一番に急がなくてはならないことは、今私の苦しみをぬくことです。私の苦しみの根源が何であるか、それを見極めて治療にあたるべきだとお示し下さいます。私自身が、教えにあう前に死んでしまう事がないようにとお示し下さった教えです。「不要不急」という言葉が聞かれましたが、最も必要で急がねばならぬ事が教えにあう事だとお示し下さいます。

この度『大人のための仏教童話』と言う本の、いくつかの仏教童話にふれさせていただきました。初めて耳にされるお話しもあるかも知れません。皆様にご紹介し、お味わい頂ければと思います。



お念仏のしずく

教えを学ぶと言うこと…

教えを学ぶと言うことは、もともときびしいものであります。もしも教えを学んで、何らのきびしさや痛みを感じないとするならば、それは教えにふれているのではありません。ただの言葉か、ただの話を聞いているだけのことであります。また反対に、どれほどの片言であろうとも、それにふれることによって、自分が何らかのきびしさを思うとするならば、それは立派な教えとなるのであります。そのことは、あたかも鏡を見るようなものであります。鏡というものは、つねに自分の姿を映して、自分の欠点、容姿の乱れをあらためるものであります。もしも鏡を見て、いつも自分の姿に満足し、その欠点をあらためることがないとするならば、それは鏡を見ながらも、鏡を見たことにはならないでありましょう。鏡の前に立って、自分の欠点に気づき、それをきびしく正してこそ、まことに鏡を見たというわけであります。教えを学ぶということも同じであります。教えというものは、決してどこかに私と無関係に、客体的(きゃくたいてき)に存在するというものではありません。それはつねに私にとってのものであります。教えとは、それを私自身が主体的(しゅたいてき)に受けとめることによってこそ、すなわち、それが私の生命の支柱(ささえ)となり、私の人生の道標(みちしるべ)となることによってこそ、はじめて私にとって教えとなるのであります。

安楽寺法要案内

--前住職七回忌法要--

日時　９月２６日(土)朝席・昼席
　　朝席10:00～　昼席13:00～
会場　安楽寺・ひかり幼稚園
●朝席
講師　相愛大学教授
　　釋　徹宗　先生
講題　『佛慧』を味わう
●昼席
講師　落語家
　　林家　染雀　師匠
講題　仏縁を楽しむ

-- 報恩講法要 --

日時　１１月１４日(土)朝席・昼席
　　朝席10:00～　昼席13:00～
会場　安楽寺
講師　岐阜　願誓寺
　　舩橋　哲成　先生
講題　信楽峻麿先生の教えの要

※各地で新型コロナウイルスの感染拡大が報じられています。
状況によっては法要が開催できないことがあります。ご了承ください。

暮らしの中の仏教語

「接待(せったい)」

「取引先を接待します。」や「接待係」など、接待とは、お客様を手厚くもてなすことを意味する言葉として一般的によく知られています。仏教では「接待」「摂待」と書いて「せったい」「しょうたい」と読み、一種の施(ほどこ)しを意味します。

本来「接待」の語源は仏教語であります。昔、道のそばや家の前に、清水や湯茶(ゆちゃ)を出して、そこを通行する行脚(あんぎゃ)僧(そうや旅僧(たびそう)などに飲んでもらうことを、摂待とか門茶(かどちゃ)と言い、そこから出来た言葉になります。そういった接待は今でも四国八十八カ所巡礼路では行われています。接待茶や、ふるまい酒というのもそこから出来た言葉になります。だから接待とは、飲食物を施してもてなすことなのです。

新型コロナウイルス感染者が各地の繁華街で「接待を伴う飲食店にて感染」等と報道されています。「接待」とは施しをする大切な心ですが、今は少し接待も自粛が必要かも知れません。